慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田山花袋「縁」：その改稿を中心に
Sub Title	On the rewriting of Tayama Katai's En
Author	宮内, 俊介(Miyauchi, Toshisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.125- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田山花袋「縁」

——その改稿を中心に——

宮内俊介

1　はじめに

「縁」の研究史を一覧するには、取敢えず小林一郎氏の文章[1]が便利であろう。同時代評から佐々木浩氏の論迄、網羅的に紹介されている。その後に発表された論を含めて、二三の洩れはあるが、研究史の大体の傾向は見て取れる。加えて、加藤秀爾氏の「田山花袋『生』『妻』『縁』」[2]を参照すれば、最新の研究史は一応視野に入る。[3]「縁」は殆ど常に三部作の一環として論じられて来ており、平面描写の変質と詠嘆性の再顕現を示した過渡期の作、というのが近年の理解のようである。

とは言え、論文の絶対数も少なく、構成の解明から主題に迫ろうとする佐々木氏の論、そして最新の小島氏の論を除けば、他は作品の読みに拘わるという性格の論ではない為か、これ迄、何故か初出から単行本への改稿が見過ごされて来ている。実は、改稿の存在そのものについても、触れられたことがないのである。[4]私見では、「縁」に於ける改稿は重

要な意味を持っている。ここでは、その問題に絞って述べてみたい。[5]

2　同時代評と花袋の自作への言及

「縁」は、「毎日電報」に連載され（明43・3・29～8・8）、連載終了後には今古堂書店から単行本として出版された（明43・11・10）。多くの「新刊紹介」の中には、

小説界の極めて寂しい四十三年の文壇に於ては注目すべき大作の一つであらうと思ふ。[6]

と言及しているものもあり、「小説界の極めて寂しい四十三年の文壇」という限定はあるものの、「注目」作ではあった。又、「早稲田文学」では、島崎藤村の「犠牲」と抱き合わせではあるが、相馬御風・前田晁・中村星湖による合評を早速掲載しており、前田晁は、

『縁』が昨四十三年の文壇の大作であり、『犠牲』が今四十四年初頭の労作であることは、僕のもとより同意する所である[7]

と述べている。花袋と博文館で机を並べている前田による評価、という留保を考慮に入れても、矢張り評判の良い作であったと一応言って良い。

その好評の理由の一端は、

『生』『妻』の二篇と併せて三部作を成すものである。『生』に於ては明治以前に生れて、明治以前の教育を受けた女を描き、『妻』に於ては明治の初に生れて明治二十年代の教育を主として受けた女を描きたるに対して、『縁』は最近に於ける所謂新らしい時代の女を描いた。このやうな大仕掛の小説は明治小説壇には今迄なかつた所で、此点

からだけでも大に研究すべき作である。（「新刊書一覧」）[8]

という言及に典型的に表れているが、三部作という規模の大きさに求められる。連作と言えば現在すぐ連想される岩野泡鳴の五部作は、既に『放浪』（明43・7）から始まっていたが、完成するのは大正も半ば、「憑き物」（大7・5）によってであり、五部作として再構成されるのは、又その後のことであった。

ところで、この「新刊書一覧」に触れられている、三部作であること、三作に通底するテーマ、共に簡潔に纒められているが、それも当然のことで、依拠したと思われる花袋自身の発言が存在していた。「妻」完結後の「早稲田文学」記者との対談である。記者が、「『生』『妻』それから今一篇を加へてトリロジイとなさる御計画だと聞きましたが、あれは事実ですか。」と尋ねたのに対して、花袋は、次のように答えていた。

さう思つて居ますが、どう云ふものでせう。それも『生』を書く時からその積りならば好かつたのですが、その考は『生』を書いてしまつた後に、友人の話などからヒントを与へられてから起つたのですから、よしこれからその積りで今一篇画いた所で、人の名やなんかも違ふのでどうもトリロジーとしての効果も充分に得られまいと思ふのです。尤も今書いて居る『田舎教師』が済んだらば、『妻』以後即ち『蒲団』などの時代から現在までを一冊に書いて見る積です。然うすれば『生』では天保時代に生れて家庭の人となつた女、『妻』では現在三十年輩位の時代の女、それから今度書くのでは『蒲団』の芳子即ち『妻』の中ではてる子となつて居る、あのような新代の女が妻となり若い母となつた生活を書く事になる。この三種の異つた時代の女を描くと云ふ事が、全体の目的ではないが、兎に角さう云ふ開展を表はせやうと思ふ。[9]

ここには、今「縁」を考える上での幾つかの重要な情報が含まれている。先ず、三部作の考えが起こったのは「『生』

を書いてしまつた後」ということ、次に、『田舎教師』（左久良書房、明42・10）を書き終えてから執筆に向かうこと、そして、三作目の内容は「『蒲団』などの時代から現在までを一冊に書いて見る積で」「『蒲団』の芳子即ち『妻』の中ではてる子となつて居る、あのような新代の女が妻となり若い母となつた生活を書く」ということ、最後に、「三種の異つた時代の女を描くと云ふ事が、全体の目的ではない」という保留、の四点である。

第一点の、三部作着想の時期を具体的に特定出来るだけの材料を、現在僕は持っていない。しかし、「よしこれからその積りで今一篇画いた所で、人の名やなんかも違ふ」という発言を勘案すれば、「生」（「読売新聞」明41・4～7）完結直後、「妻」（「日本」明41・10～42・2）の連載開始前という訳ではなく、少なくとも「妻」連載中に「積り」が具体的な形を見せて来たが、その段階では既に人名が食い違ってしまった、ということであろう。何故ならば、第三点とも関わるのだが、「新代の女が妻となり若い母となつた生活」にモデルの岡田美知代が入るのは、四十二年に入ってからのことで、一月、田山家に入籍した上で、永代静雄と結婚、三月に出産、ということになる。[10] そのこととも関わるのだが、抑々、「早稲田文学」記者が三部作の計画について尋ね得たのは、同じ「早稲田文学」に、

●田山花袋の『妻』は先月中旬完結したが、氏は更に『若夫婦』を書いて、『生』『妻』『若夫婦』のトリロジイにしたいと言つてるさうだ。[11]

という消息が、かつて掲載されていたからであった。『若夫婦』という端的な題名は、美知代と永代の結婚生活を目前にし得て、初めて命名出来るものである。三作目の内容は、二人の結婚によって最終的に確定したのであろう。

次に、第二点は、「縁」の執筆開始が、早くても四十二年九月以降であることを示している。そして、第四点は作品のテーマに関わる訳だが、花袋自身のこのような保留があるにも拘わらず、先の「新刊書一覧」のように、三世代の女を

描いた連作と受け止められていたことを、今は確認しておくに止める。

以上のような好評であったにも拘わらず、その後の「縁」は、新潮社（大4・4・4）から文庫版で刊行されて版を重ねるものの、『花袋全集』第二巻（大12・3・18、昭11・10・15、昭48・9・20、平5・5・20）、角川文庫（昭31・6・20）に収録されるのみであった。新潮社版刊行の余波は、二十章の一節が「埠頭の夜」と題して「新文壇」（13巻3号、大4・6・21）に再録されたことにも表れているが、三部作と称され、又、「蒲団」の後日譚としての興味が先走る為か、却って影の薄い作品となってしまったようである。

ところで、先の「新刊書一覧」の「『生』に於ては明治以前に生れて、明治以前の教育を受けた女を描き、『妻』に於ては明治の初に生れて明治二十年代の教育を主として受けた女を描きたるに対して、『縁』は最近に於ける所謂新らしい時代の女を描いた。」という纏めに相応しいのは、「縁」では無く、却って『若夫婦』という最初の題名だろう。それが、「縁」という題名に変更されたのは、単に他の二作の一字題に合わせたに過ぎないのだろうか。題名の変更は、〈若夫婦〉という主題・題材から〈縁〉という主題への変更を反映している筈ではないか。その、現在も主題の一つと考えられている〈縁〉については、既に同時代の相馬御風が、先に挙げた〈『縁』と『犠牲』合評〉の中で、

作者が人間の集散離合と云ふ事についていかにも感慨に堪えぬやうに『縁』と云ふ観念を持ち廻つて居る[12]

と批判し、それが、作品にセンチメンタルな調子を与えること、又、

『縁』は『生』『妻』の二篇と合して一種のトリロジーを成すものと云ふ。併し前に出た二篇と比べて見ると、ひどく全体の調子が違ふやうに思ふ。私は『縁』を読んで寧ろずつと以前に同じ作者の書いた『野の花』とか『故郷』などを思ひ出した。

という感想を与えることに触れて、「縁」の他の二作との調子の違いを強調していた。その調子が『野の花』『ふる郷』と同じかどうかについては異見があるだろうが、「縁」が他の二作と肌触りが違うことは、僕の印象とも一致している。それは何故なのだろうか。題名・主題の変更が、作品の表現・構成に影響を与えたのではないだろうか。作品の主題や内容に拘るのではなく、僕は、この個人的な印象の拠って来る原因を、表現や構成の中に求める所から出発しよう。そこに、作者花袋のモチーフが見え隠れしているように、感じられるからである。

3　作中の時間の経過と年立て

作中に於いては、足掛け四年の時間が経過している。細かくなるが確認しておこう。

第五節に「冬から春までの間に、少くともさうした手紙の五通や六通は清は出した。」[13]とあり、その少し後に「春が来て、梅が咲いた。」とある。「一」の現在を一年目とすれば、二年目に入る訳である。その一年目は、「戸外には秋雨が蕭々と降つて居た。」（一）とあるように、作品の現在は「秋」から始まる。次の年越しは、「三十三」の「清が年始に出かけて行つた時、お三輪はかう言つて、その産婆を勧めた。」で、ここから三年目に入る。最後が「四十九」の「二人は新しい年をこのさびしい幽棲に迎へた。」で、以後四年目ということになる。

この四年目の下限は以下のようになる。「三月のある寒い晩」（五十一）木下敏子とお国は山崎雍之助の寺に到着、「寺の本堂に一月以上も居た」（五十四）後、帰京。「まだ一週間経たないある朝」（五十五）馬橋が訪ねて来る。服部清の家への「馬橋が来たといふ話をしてから三度目の訪問の夜」（五十六）、敏子は「兎に角明日小石川へ行つて相談して来ます」（同）と語り、次の「五十七」冒頭では「一夜（あるよ）」とあって、敏子の失踪が明らかにされる。「五十六」と「五十七」

の間の時間の経過は不明。敏子が「馬橋の下宿に行つて居るといふことも二三日して知れた。」「二三日――一週間――かれは恋の燃えたり消えたりするのをつくづく独り考へて見る人であつた。」（五十八）そして、「それから十日ほど経つてから」（同）馬橋が道具を取りに来て、一応物語は閉じられる。「それから十日ほど」の「それ」が何を指しているのか分かり難いが、敏子の失踪を指していれば「四月」、清の感慨を指していれば「五月」が、作品末尾の時期ということになる。

作中の時代を示す客観的な指標としては、「戦争」（一）の語があるだけだが、発表時点を考えれば、当然、日露戦争（明37・2～38・9）を指すことになるだろう。清は「戦争に行つた」（一）と述べられ、作中の現在は「それから経過した四年間」（同）と表現可能な時点ということになる。起点を三十七年とするか、三十八年とするかによって作中の現在が変わるが、清の従軍を花袋自身の従軍（明37・3～9）に重ね合わせてそれを起点とすれば、作中の現在は四十一年ということになる。

その年立ての設定は、初出連載第一回（「一」前半）の結末部で、

四年間――其間に叔父も死んだ。兄も死んだ。親しい友も死んだ。かれは其度毎に味つた暗い感じを頭に繰返した。

（傍点、筆者。漢字を通用の文字に改めた以外は原文の儘、以下同じ）

と、兄実弥登の四十年十一月九日の死、「親しい友」即ち国木田独歩の四十一年六月二十三日の死を、清に回想させていることとも合致する（「叔父」については未詳）。しかし、この傍点部は単行本で削除され、その削除が、以下、この論での論点となる訳だが、同様の例がもう一箇所ある。

友達の群にも栄達したものもあれば、零落したものもある。三十七で肺病で斃れたある友は、轗軻不遇の中に、い

つかその文名を不朽に留めて居た。（傍点、筆者）

右に挙げたのは連載第四回（「二」後半）で、例によって傍点部は単行本で削除されたが、この「友」も独歩を指していると考えて間違いない。

しかし、「二」の現在を四十一年とすれば、作品末尾は四十四年ということになり、作品の発表時点を通り越してしまう。確かに、花袋の初期作品の中には、例えば「わすれ水」（「国民之友」明29・8）のように、二十六歳の花袋が、自身をモデルにした四十六歳の主人公を描くという作者の現在を追い越してしまう作品の例もあるのだが、極少数の例であり、しかも後にはそういった例も無くなる。リアリズムを旨とする花袋にとって、当然の変化だろうが、だとすれば、これは、この年立て設定の大きな難点となる。実は、難点はこの一点ばかりではなく、花袋の年譜と照らし合わせると、他にも多くの齟齬が生ずることは、次章に触れる。猶、戦争の終わった三十八年を起点とすると、作中の現在は四十二年ということになるが、同様の理由で齟齬はより拡大することになる。

4　作中の年立て

作中の年立てについて明確に触れているのは、小林一郎・堀井哲夫・佐々木浩の三氏である。小林氏は、「凡そ四十一年から四十二年の間」[14]、堀井氏は、「明治四十年から四十二年へかけての出来事」[15]、佐々木氏は、四十年秋から四十三年四月まで[16]、と指摘している。結論から先に言えば、先に見て来たように、作中での足掛け四年の時間の経過という点から、佐々木氏の指摘が最も適切なものである。「九」での清と敏子の再会は、花袋の年譜に当て嵌めれば、美知代の再上京が四十一年三月末と言われている（作中での敏子の上京は「四月」（二十五）とあるが）ので、四十一年のことになり、そ

れに続く、田辺即ち国木田独歩の死、清の九州旅行等のその他の事実も、佐々木氏の指摘した年立てに当て嵌まる。と言うより、これらの事実から佐々木氏は年立てを再構成したのであろうが。「一」の現在を四十一年とした場合、これらの事実と一年ずつずれて行くことになり、適切とは言えない。

とすれば、「一」の現在は四十年秋ということになるのだが、先に挙げた、

兄も死んだ。親しい友も死んだ。（初出第一回）

三十七で肺病で斃れたある友は、轗軻不遇の中に、いつかその文名を不朽に留めて居た。（初出第四回）

は、単なる勘違い、誤記ということになるのだろうか。その勘違いの訂正として、単行本では独歩に関わる二箇所の記述を削除したという訳であろうか。どうもそうは考えられないようである。その点を理解する為にも、回り道のようだが、作中の時の流れ方を確認しておく必要がある。

初出第一回（以下、初出の連載回数は算用数字のみで示す）では、清は雍之助の寺に滞在しており、滞在中の二人の会話が示される。「2」（「一」後半）から「4」（「二」後半）迄は、清の寺への訪問と滞在中の様子が描かれるが、この訪問と滞在は、「1」の滞在と同一の滞在と言える訳では無い。

来る度に、都の男はかういふ風に田舎にかくれた友に言つて聞かせた。（2）

かう言ひながら奥に駈け込んで行くのが例であつた。（3）

けれど一番旨いのは矢張り晩春に獲れる鮎子であつた。（略）二人は散歩の次手に、其小屋に寄つては、いつもそれを買つて来た。（4。以上、傍点は共に筆者）

といった表現を見れば明らかなように、一度の訪問を描いたものではなく、数度に亘る訪問を、前後の時間の差異を無

視して纏めて回想しているのである。

同様のことは、続く清の故郷訪問を描く節についても言うことが出来る。「5～8」（「三」）は、清と雍之助の二人が清の故郷の町を歩きながら敏子について語る場面だが、

清は雍之助をよく其処に連れて行つた。（5。傍点、筆者）

とあって、作品に描かれるのは、何回かに亘る訪問の内のある特定の訪問であるが、先と同様、それが「1」の滞在時期に同定出来る訳では無い。

又、「9・10」（「四」）は、清の家の寺の訪問と、玉かつみの小照の訪問が描かれるが、

今日に限らず、故郷の町を歩く時は、清はいつもかうした調子であつた。（9）

二人は其の花の時分にもよく出かけて行つた。（10。以上、傍点は共に筆者）

とあり、寺の訪問は「5～8」の続きなのだが、小照の訪問については、一度の訪問を描いたものでは無く、矢張り数度に亘る訪問を纏めて描いているのであって、「5～8」に時間的に継続するという訳ではない。

この後「11～13」（「五」）は、清と敏子の関係に戻り、清と敏子、清と敏子の父親との間の手紙の遣り取りが描かれるが、ここではもうそれ以前とは異なり、四十年冬を起点として、自然の時間の流れと共に物語も展開して行くことになる。以後も同様である。

以上の確認から明らかなように、「1～10」（「一～四」）に於ける時の流れ方は特殊なのである。佐々木氏が、「縁」を五つの部分に分けた上で、この部分を、

Ⅰ　プロローグとしての序節。服部清と山崎雍之助の会話・回想から、二人の今日までがたどられる。（「一」～「四」）

（前出、註（16））

と纏めているのも、故のない事ではない。とは言え、「2」～「10」の叙述の中に、「1」の現在を暗示するような表現が他に全くない訳ではない。

先ず、繰り返しになるが、「1」には、

四年間――其間に叔父も死んだ。兄も死んだ。親しい友も死んだ。かれは其度毎に味つた暗い感じを頭に繰返した。

（傍点、筆者）

とあって、「1」の現在が四十一年だと花袋に認識されていたことを再確認しておく。

次に、

十三四年の歳月は短かくはなかつた。（4）

がある。「十三四年」の起点は本文からも明らかでない。「其時分から夥伴（なかま）の一人が言つた。」（4）という「其時分」が起点になるのだろうが、それが何時のことか明確でない。本文の叙述に関連する太田玉茗の経歴を挙げて見れば、二十三年三月、花袋と「穎才新誌」誌友会で知り合い、二十七年七月には東京専門学校を卒業、三十年四月、花袋等と『抒情詩』を刊行、三十二年五月、羽生の建福寺の住職となった。「夥伴」という言及は、東京専門学校在学中、或いは『抒情詩』の共著者等を連想させるが、いずれにしても計算は合わず、「十三四年」という言い方は、「1」の現在と正確に対応するものではないだろう。

第三に、

清が十年前に書いた『故郷』といふ小冊子であつた。（5）

と触れられる『ふる郷』は、三十二年九月の刊行で、それを「十年前」と言える現在は四十二年ということになるが、既に見て来たようにそのような筈も無いので、この表現も正確に「十年前」ということではなく、「十年前」位といった意味であろう。

そして、雍之助が敏子の上京の予定について尋ねたのに対して、清が、

来年になつたら、出て来るんだらう。（6）

と答える。美知代の四十一年三月末の再上京を既に知っている花袋の意識の中では、この「6」の現在は、四十年であることが明らかである。同様のことは、続く、

山の中に一年以上もじつとしてさびしく暮して居る（6）

という叙述についても言える。三十九年一月の美知代の帰郷から「一年以上」という表現の想定している現在は、四十年ということになる。又、

あの作が出てから逢つたことがあるかねえ？（7）

という雍之助の質問は、読者にも「あの作」が「蒲団」を指していることが明らかであり、この時点が四十年九月以降であることを示している。

最後に、

一二年の間に此町にも少なからぬ変遷があつた。利根川の手前でつかへて居た鉄道は、鉄橋が出来上つてヤ（ママ）がて開通した。町にも大きな寺の裏山を開いて停車場が出来ることになる。運送屋が出来る製粉会社が出来る、今度は更に大規模のモスリン会社が城址に建てられると言ふ（10）

という部分がある。関連の年譜を挙げると、東武鉄道の館林までの開通は、四十年八月、三十三年設立の館林製粉が、日清製粉を吸収して現在の日清製粉の基礎を築いたのが、四十年十一月、現在地の新工場に移転したのが四十一年、東洋モスリンの館林工場が操業を開始したのが、四十一年一月、上毛モスリンの新工場の起工は、四十一年で、完成は四十三年のことであった。[17] 以上のような行立を見聞していたであろう花袋が、「一二年の間に」という語りを書き付ける時、意識の中の起点となる現在は、少なくとも四十一年以降だったであろうと思われる。

以上、次のように纏めることが出来るだろう。先ず、「1」と「6」の間の何れかの時点で、作品冒頭部の設定は四十一年から四十年へと変化させられたこと。次に、それにも拘わらず、小照に関わる「10」に於いては、四十一年以降の意識が混入していること。ここからも、小照の作中での位置付けの微妙さが感じ取られるのだが、今は措く。このように纏めて作品を振り返って見ると、以下のような二つの問題も派生して来るのである。

先ず、前者に関わって、「二十七・二十八」に描かれる四十一年秋の清の寺滞在を考えたい。清の滞在は、花袋自身の四十一年十月からの羽生の建福寺滞在を下敷きにしている。敏子の入籍問題を雍之助と語り、自身の感慨の中に耽って行く清の姿は、「一～三」に描かれる清の姿とよく似ている。それも当然であろう。当初「一～三」は四十一年秋の事と設定されていたのであり、その最初の設定が生かされていたならば、「四」の小照の話題の後に、この「二十七・二十八」がその儘続いていたかも知れないのである。その推測の傍証ともなるのが、次の一文の存在であろう。

かう言つては変だが、今少し深い縁と言ふやうなものがあつて、敏子の不幸を放つて置くといふことが出来ないやうな心持になつてゐる。（二十七）

題名となった「縁」の、作中の初出である。続く「二十八」には、「縁」や、関連した「運命」が頻出する。ところで、

その「運命」という語の初出は、

人生には運命の糸の塊といふやうなものがあつて、それが彼方に引張られたり此方に引張られたりしてゐるやうなものだねえ。（三）

であった。この「三」から「二十七」にかけて「運命」の語が散見される一方で、「縁」の初出がやっと「二十七」であることは、「二十七・二十八」の位置付けの特殊性を示している。又、「寺に一月以上も居た」（二十八）と説明されるにしては短過ぎる二節に、疑問も湧いて来る。或いは、あの「蒲団」の、第一章の現在から、二・三章と過去の回想に戻り、四章で一章に続く現在に帰るような構成を自己模倣するつもりならば、「一～四」の現在から「五～二十六」の過去の回想に戻り、「二十七・二十八」の現在に回帰するという構成すら可能であった。しかし、現実の花袋は様々の可能性の芽を摘みながら、直線的な時間の流れる比較的単純な現在の構成を選択したことになる。

次に、後者に関わって、

三年前には顔を赧らめずには言はれないやうなことも言つた。（1）

という何でもない叙述にも、或る疑問が湧いて来る。即ち「三年前」とは何時か、花袋は何時を起点と考えて「三年前」と書いているのか、ということである。最初の設定の四十一年を起点とすれば、三十八年ということになる。その後の作中での日露戦争への言及を勘案すれば、戦後の時代思潮の変化が念頭に置かれているということになるのだろう。しかし、三十八年の花袋に何か心境の変化を齎す事件が起こったのだろうか。美知代に永代という恋人があることを知った年ではあるが、これが転機に当たるのだろうか。そうは思えない。取り立てて言うだけの事件が無くとも心境の変化を齎すことは当然有り得るが、矢張り何等かの出来事を想定する方が分かり易い。二つの可能性について考えて見よう。

先ず、四十二年を起点と考えることは不可能だろうか。先に、花袋の「「妻」に就て」（前出、註（9））で見たように、「妻」の完結した四十二年の時点で「縁」の構想はある程度纏まっていた訳であるから、その構想の立った時点を花袋が無意識の内に起点としてしまったと考えるのである。或いは、『田舎教師』を完成して、「縁」のメモでも始めた時点と考えても良い。これは例のないことではない。例えば「蒲団」の冒頭で、時雄の年齢を「三十六」（一、以下、引用は『全集』に拠る）とするのは、三十八年の設定であるにも拘わらず、芳子を帰郷させた結末の時点、即ち、三十九年の視点が混入しているからである。又、芳子から初めて手紙が来た年を「今より三年前」（二）とするのも、実際に美知代から初めて手紙を貰った三十六年との関係で言えば、起点は「一」の現在である三十八年ではなく、同じく三十九年である。このような前例を見れば、四十二年を起点として三十九年を振り返っている可能性も無視出来ない。その三十九年は、美知代を帰郷させた年であり、「文章世界」を創刊した年でもある。又、島崎藤村が『破戒』を刊行し、本格的な自然主義の時代の到来が予感された年でもある。花袋に何等かの心境の変化が起こっても不思議ではないだろう。

次に、四十三年を起点とすることも出来る。理由の一つは、四十二年と考えた時と同様で、執筆時の意識が混入していると考えるのである。そして、理由の第二は、作品が雍之助の寺に於ける清の描写を導入としていることに関わる。何故、「縁」はこのような場面から始まらなければならないのだろうか。既に確認したように、四十三年の「三月のある寒い晩」（五十一）敏子とお国は赤ん坊を連れて雍之助の寺を訪問し、「寺の本堂に一月以上も居た」（五十四）のである。二人の帰京は、四月の或る日ということになる。そして、「二人が寺に居る間に、清も一度東京から訪ねて行つた。」（五十三）とあるので、この記述が事実を基にしているとすれば、[18] 花袋は、四十三年の三月から四月の間の何れかの時点で、羽生を訪れていることになる。一方、作品の冒頭「1～4」は、三月二十九日から四月一日迄の掲載部分である。新聞

連載開始直後に短期とは言え旅行に出たとは考え難いので、羽生訪問の後、「縁」の連載が始まったのであろう。[19] とすれば、つい先日の羽生訪問は、果たして作品に全く影を落とさなかっただろうか。しかも、四十三年を起点とすれば、「三年前」の四十年は「蒲団」発表の年である。花袋の意図は兎に角、島村抱月の「此の一篇は肉の人、赤裸々の人間の大胆なる懺悔録である。」[20] という評が、以後肉欲文学・肉欲描写を続出させ、花袋自身、「文章世界」の投稿作品に見られる肉欲描写に警鐘を鳴らし続けなければならないという後遺症に直面することになる。花袋個人に止まらず、これ以後、どんなことでも「顔を赧らめずに」話せるような時代になった、とも言えるだろう。先日の羽生訪問に引き摺られて、つい「三年前」と書いたものの、美知代の上京、永代との交際の再開、失踪、出産、結婚生活という、本来の物語の本筋を思い起こして、「1」の末尾で何とか四十一年を現在とする所に引き戻した、と考えることも可能ではないだろうか。

しかし、以上二つの推論は、飽く迄も可能性に止まるものかも知れない。四十一年を起点とする読解を決定的に覆すだけの論拠を持たないからである。とは言え、このような推論の存在を許すことが示しているのは、繰り返すが、「縁」冒頭の曖昧さなのである。

5　執筆中の花袋の意識の混入

先に、「1」と「6」の間の何れかの時点で、作品冒頭部の設定は四十一年から四十年へと変化させられた、と述べたが、それに関連して「5」には興味深い表現がある。

かう言つた清は、其後までも其時のことを忘れなかつた。

という一文である。或る特定の時点に於いて、登場人物が過去を回想するという場面は作中にも多く見られるが、この

ような「其後までも」といった形の、語られている時点から不特定の未来に向けての表現、言い換えれば、登場人物に可能な最下限の現在（例えば、作品発表時）をも含めた或る時点が登場人物の語りの現在であることを明示するような表現は珍しく、他に一箇所あるのみである。[21] この文は、回想する清の現在が「5」の時点よりずっと未来であることを示している。

それでは、その回想する清の現在は何時なのか。それは明確でない。手掛かりとなる文が他にない上に、この作品は、清・語り手・作者の三者の境界が曖昧で、「清＝作者」と考えれば、執筆中の現在とも考えられるからである。しかも僕には、回想する清の現在を執筆中の現在即ち四十三年とする推定の妥当性は高いとも感じられるのである。ともあれ、このような文の残存は、花袋が語りの現在及び作品の時間構成を明確にしない儘、そしてその結果として主題・モチーフも揺らいでいる儘、連載を開始したことを示しているだろう。

花袋の「縁」起稿の時期は明確でないが、「「妻」に就て」（前出、註（9））を参照すれば、最も早く見て『田舎教師』脱稿後の四十二年九月以降、先の「三年前」の起点を考察した際の推論を基に最も繰り下げて言えば、四十三年三月の花袋の羽生訪問の後だろう。それは逆に言えば、最も繰り下げて考えた場合でも、初出の「120」以後、特に馬橋の再登場と敏子の再失踪などは、全く花袋の予想もしない展開だったということでもある。日付から考えれば、「24～25」（4月23・24日掲載、「十」）の清の感慨などは、美知代の再失踪を受けた花袋の感慨をその儘反映している可能性もある。同様に、作品末尾の、

平行線は猶続いた。縁の糸はまだ切れなかつた。（125。傍点、筆者）[22]

という部分も、連載開始忽々の美知代の再失踪を、執筆中の花袋がどう位置付けたかを示しているかも知れない。「縁（えにし）

の糸」千鶴子の死（明44・6・30）を予見すべくもない花袋が、既に単行本末尾では「縁の糸」の存在を抹消することになるのだから。

又、起稿の時期は明確でなくとも、「今度書くのでは『蒲団』の芳子即ち『妻』の中ではてる子となつて居る、あのような新代の女が妻となり若い母となつた生活を書く」という、当初の目論見は判然している。しかし、「若夫婦」の生活は飽く迄主要な題材であるに過ぎず、「三種の異つた時代の女を描くと云ふ事が、全体の目的ではな」かった。「全体の目的」は「「妻」に就て」では不明だが、少なくとも、その題材を基にどのような主張を盛り込むかが次の問題だった筈である。それが、先ず〈縁〉という主題を導入し、次に若夫婦に第三の男清を配したことによって、「蒲団」の後日譚としての色調が強まったことは否めない。その変質は、連載開始の前に既に行われていた筈だが、その後、目の前で繰り広げられた美知代と永代の夫婦生活の破綻は、「若夫婦」を描く作品から「蒲団」の後日譚へと「縁」の性格を変貌させていた花袋にとっては、却って好都合だっただろう。

それでは、語りの現在・構成・主題・モチーフの揺らぎ、「縁」の性格の変質等を花袋に齎したものは何だったのだろうか。それは、最早言うまでもないが、花袋自身の現在、花袋・美知代・永代三者の関係の現在だっただろう。改稿を背景にして、「縁」の表現・構成を見て来ると、執筆中の現在が常に作品に或る圧力を与えていると考えざるを得ない。先行の諸研究の中では、唯一佐々木氏が、

子供を手離した美知代と永代静雄のその後の動向は、ここでは必要としない。子供を養女（戸籍面では「二女」で玉茗の実子とされている）に出した時点で、『縁』が執筆されると共に稿を閉じていることを確認すればよい。（前出、註（16））

と、作品の末尾の時間が連載開始の時点に繋がることに明確に触れているが、そのダイナミズムには踏み込み損ねている。

三部作の中、「生」「妻」は、明確に花袋の体験した過去を再構成しているが、「縁」の題材は、現在進行形で展開している結論の見えない出来事であった。しかもそれは「蒲団」の後日譚でもあった訳で、花袋は、読者のその興味を利用し、予備知識に寄り掛かる誘惑から逃れられなかったのであろう。又、現実には存在していなかったかもしれない「蒲団」事件のある決着を、密かに作中に滑り込ませようとしたのだと思われる。常に執筆中の四十三年現在の感慨が流れ込み、作中の現在を過去のものとする感慨によって染め上げられてしまうように見えるのも、あながち語りの現在が確定されていない為ばかりではなく、決着を付けようとする花袋の意識の反映かも知れない。「縁」は、執筆時の花袋の意識が生の形で混入し、花袋の現在を合理化する為の〈自家用〉のものである可能性の強い、「私小説」的な作品だと言えるのではないか。その結果、前二者とは異なった語り・肌触りを読者に感じさせるのであり、その内実の考察については、稿を改める他ない。

註

(1) 『田山花袋研究—博文館時代(三)—』桜楓社、昭55・2・25。

(2) 「解釈と鑑賞」57巻4号、平4・4・1。

(3) 小林・加藤両氏の論に洩れた論、或いはその後の論に次のものがある。「「生」「妻」「縁」—一つの自然主義的人生観—」市川三郎(東北帝国大学国文学会「会誌」昭10・12・10)、「花袋「縁」中の一モデルの証言」清田啓子(「駒沢短大国文」10号、昭55・3・21)、「「縁」の西さん—田山花袋と柳田国男との疎隔—」岡保生(昭和女子大学「学苑」522号、昭58・

6・1）「田山花袋『縁』論」小島規子（お茶の水女子大学「国文」75号、平3・7・15）「もっと作品論を……―例題「縁」（田山花袋）―」宮内俊介（有精堂編集部編『日本文学研究の現状II近代』有精堂出版、平4・6・9）。

（4）結末の一文については、後述の如く平岡氏が触れている。

（5）拙稿（前出、註（3））に於いて、問題点のみ指摘しておいた。

（6）「新刊紹介」司馬太「ホトトギス」14巻5号、明44・1・1。

（7）〈『縁』と『犠牲』合評〉「描く作と語る作」「早稲田文学」63号、明44・2・1。

（8）「早稲田文学」61号、明43・12・1。

（9）「「妻」に就て」「早稲田文学」44号、明42・7・1。

（10）花袋は、美知代の妊娠を、「妻」連載開始前の四十一年九月半ばには知っているが、この時点では、結婚及びその後の出産等は予測すべくもなかった。「花袋「蒲団」のモデルを繞る手簡」（「中央公論」昭14・6・1）参照。猶、以下、花袋の生活年譜については、小林一郎『田山花袋研究―年譜・索引篇―』（桜楓社、昭59・10・25）に多くを負って居る。

（11）「彙報　文芸消息」「早稲田文学」40号、明42・3・1。

（12）「センチメントと描写法」御風生「早稲田文学」。

（13）以下、単行本本文の引用は『全集』に拠る。漢字を通用の文字に改めた以外は原文の儘とした。又、節数は、以下、漢数字のみで示す。

（14）「田山花袋三部作論―「生」「妻」「縁」―」「国文学」12巻9号、昭42・7・20。

（15）「花袋二人の女と『蒲団』『縁』」「国語国文」39巻8号、昭45・8・25。

（16）「田山花袋『縁』論」「富山大学教育学部紀要」25号、昭52・3・10。

（17）『〈館林双書第七巻〉館林郷土史事典』（館林市立図書館、昭52・3・30）及び、館林市立図書館の御教示に拠る。

（18）但し、清の寺滞在を描く「五十三」は、初出「119」一回分のみから成っており、又、清の言動についても詳しい描写がある訳では無いので、事実か何うかについては保留が必要であろう。

（19）「縁」は非常に休載の少ない作品で、百二十五回の連載の過程で、休載は、4月11・19日、5月6日、6月12日、7月9・18・24日、8月3日の八回に過ぎない。因に、「生」は、八十回連載で、十八回。独歩の見舞い等、生活上の多事が

影響しているだろう。「妻」は、百二十回で、四回である。

(20) 「『蒲団』合評」星月夜「早稲田文学」23号、明40・10・1。

(21) 「三十三」に「清には其夜のことが後まで忘られなかつた。」とある。

(22) 傍点部は、例によって単行本では削除された。この削除については、「田山花袋『生』『妻』『縁』」平岡敏夫(『日露戦後文学の研究　下』有精堂出版、昭60・7・20)も、指摘している。

(93・9・25稿)